趣味を実益に昇華させた男 西山 徹さん

ひと・シリーズ／その1

その日は，ときどき突風をまじえた強い横風のふきなぐる異様な雲ゆきであった。東名高速のインターは黄信号を点滅させてドライバーの注意をうながし，要所要所に設置された吹流しは，ちぎれんばかりにうちふるえていた。事実，80 キロぐらいで走るくるまは，軽量の悲しさか，横なぐりの風を受けてしばしばあおられる。

横浜インターチェンジ付近では，のしかかるように頭上を覆っていた重い空も，富士市付近にさしかかるときには何日ぶりかの紺碧の青空，ときたま，けたたましいエンジン音をたてて走る大型トラックからこぼれ落ちる製紙用材のチップの乱舞にあうものの昨日からの雨雲はいつのまにかどこかへ消え去っていた。それにしても，ものがものだけに，この裂風はえらく気になる。

11 月 11 日，富士宮市でおち合った飛行機チーム一同は車 4 台に分乗して目的の場所へ向う。透明な空気は秋の山路をつつみ，強風にとばされる山頂付近の雪あらしが富士の西尾根を伝いおりてくる。外は相当な寒さだ。この強風が弱まってくれれば少しは助かるがと祈る気持も通じないのか，車窓にあたる山風は，都会地の音ではないナマのきびしい自然を伝える。

目的地に着く。絶好の飛行条件を求めて周辺を念入りに眺め回して再び移動，また確かめて，また少し動く。われわれの眼前には，富士山の大沢崩れを中核とする山のあやしい美しさがのしかかるように迫る。ここは御殿場から入り込んだ所，俗に朝霧高原といわれる富士の裾野の一角である。

「ちょっと，風が強すぎるか」

「15 メートルは吹いているな」

「まあ，やってみようや」

はてしない広い草原の中で，一団の人影が風と寒さに挑むかのようにひとつの作業にむかって動き出す。小さな吹流しを立てる者，燃料箱を出す者，工具箱を取出す者，機体をおろす者，主翼を細心の注意をもっておろす者。そして作業は始まる。模型飛行機を飛ばす作業が。それも真剣な顔つきをした大勢の大人たちの手で……。

「この風で，うまく飛ぶかな」

「少しやんだときやるか。小さいほうを最初に飛ばしてみよう。上がってしまえば，もう大丈夫だからな」

機体にセットされた機器をていねいにチェックして，燃料をつめる。主翼を胴体にバランスをとりながら，ゴムひもで十字にしばりつける。2回，3回とエンジンをかけるが，寒いせいか，なかなか始動しない。

「ブブブゥー，ブブー，ババリバリバリ……」

かかった。小さいながらエンジン音は豪快そのもの，強風の間合いをみて押し出すように発進させると低空をよろけるようにもだえとぶ。発進数秒後に次席操縦士氏の作動させる機体は 20 メートル級の寒風にあおられてあえなく墜落。機体の被害は尾翼破損その他，全治数時間との診断でボンドなどを利用して応急修理にかかる。

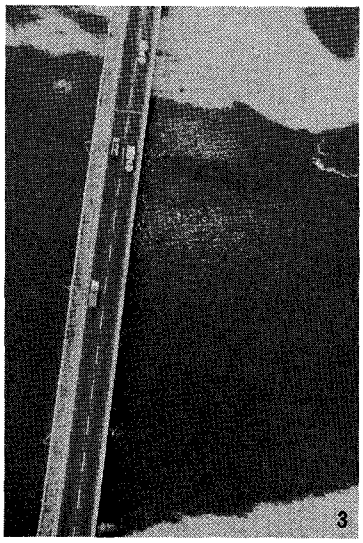
「よし，それでは一等操縦士も着いたので，大きいやつを飛ばそうや」

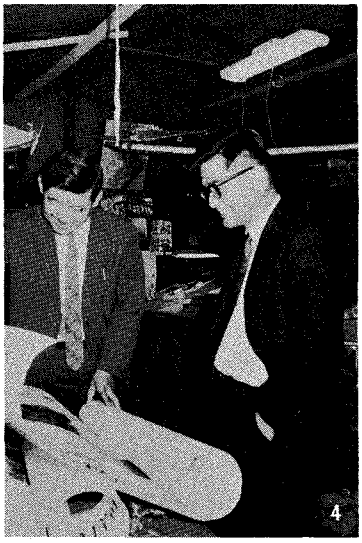
西山キャプテンの指令がでて，実用機の登場となる。機体長 1.7 メートル，重量 6 キログラム，翼幅 2.3 メートル，エンジンは 8 0（はちまる）クラス焼玉 13 cc の市販最大のもの。登載するカメラもニコンモータードライブで，それに対応する機体も，もはや模型飛行機の域を脱して，堂々たるホンモノの風格である。

〝模型飛行機にカメラを積んで航空写真を撮ろう〟

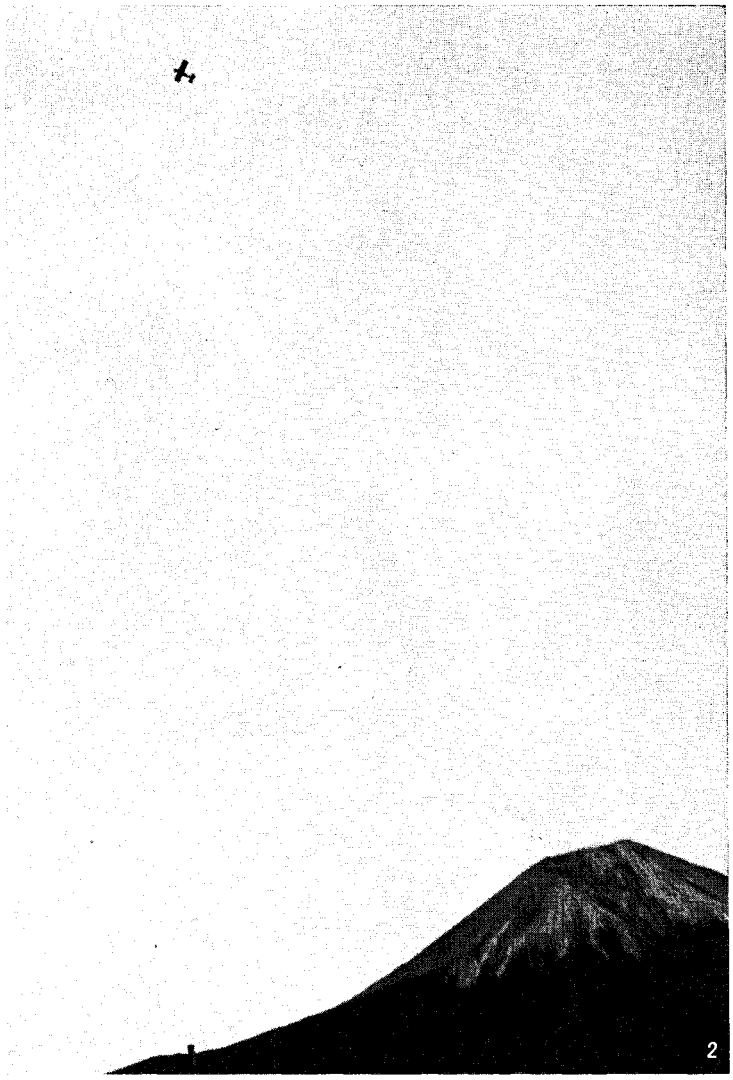
コロンブスの卵ではあるが，この着想をいだいたときの西山 徹さんの胸中には，いま飛翔すべく胎動を始めつつある 3 号機のこの大きさが，はたしてイメージの中にあったのだろうか。

昭和 2 年，九州は佐賀の有田町で西山さんは 9 人兄弟


3


4

の下から2番目として生まれた。多くの兄弟のなかの一人として，いまは異国となった現在の北朝鮮人民共和国慶鏡南道で少年期をすごした彼は，冬期のスキー，スケートなどの遊びのほかに，グライダーから入門して模型飛行機のだいご味を次第に覚えていく。そして敗戦，死線をこえての母国への旅路，労苦のあとの多感な少年の網膜にうつる，荒野と化し人心もすさみきった祖国の荒廃……。土木工学を志ざしてゆく一端の動機もその辺にあったといえよう。熊本工専からさらに向学心にもえて九大土木に進み，構造工学を専攻して工学士西山　徹が誕生。昭和28年4月，建設省に入省とともに，中部地建企画室に配属。高岡，石川工事事務所では主として河川の仕事に携わり，その後はおもに道路関係の仕事を手がけ，木曽，名阪の所長を経て中部地建の企画部技術管理官。ここで，模型飛行機を利用する航空写真撮影という卓抜な着想への地ならしをし，現在は岐阜国道工事事務所長。奉職以来17年間，一筋に中部地建管内を歩んできた建設行政の最前線にたつベテランである。



【写真説明】

1 おりからの寒風の中で愛機の補修をする西山さん．

2 夕月をみて寒風に翔う3号機．

3 実用機が昭和45年8月に撮影した「新木曽川橋梁」．

4 建設省名古屋技術事務所で実用機が撮影してきた写真を前に語る西山さん（右）と松浦編集委員（左）．

5 飛行準備をするメンバーの動きを見守る西山キャプテン（左）．

6 岐阜国道工事事務所所長室で指揮をとる西山さん．

6

定期観測等，成果は日を追って高まってきている。意外ともいえる解像力をもった写真の数々は通常の作業には十分たえうるだけの実力を持つ。高度500メートルを上限とする実用機は，平均200メートル級の高さを保って巡航し，通常 20 分ぐらいの滞空作業をこなすことができるそうだから応用範囲もかなり広く，国土地理院などから引合いがあるということも，十分にうなづける。

「バリバリバリバリ——グウォウォーン——バリバリ——」大きな轟音を残して主席操縦士氏にあやつられた3号実用機は，おりからの強風の中をややよろめき気味に飛び立ち，富士を背に旋回し，姿勢をたてなおして500メートル近くまで上昇する。爆音ともいえる軽快なノイズを残す機影は，おりから沈みかけた夕陽を浴びて，セスナ機とみまごうシルエットとなってうかぶ。

山が好き。酒は一滴も飲めない。中肉中背の浅黒いがっしりした表情をもつ西山さんは，倶子夫人との間に3人の男子をもうけられた。立山からとった長男立君，大山からとった次男大君，立山は雄山からとった三男雄君，字画の少ないこと，左右対称であるという願いは三男でもろくも崩れてしまったと苦笑するが，男系家族の伝統は立派に守っておられる。

「子供といっしょに飛行機をつくっていますよ。まあ，親父というよりは遊び友達ですね」とほほえましい。いつでもだれでも飛ばせる飛行機を，と願う西山さん。

人家密集地では危険で飛ばせないために気球方式を考えたり，無人ケーソンの開発にも意欲をもやす西山さん。てれ屋で温和な表情に似合わぬ仕事ぶりだが，多くの人々の力強い協力にささえられて，明日の想を練っておられることであろう。しんどい工事事務所長の勤務の間に，「是々非々」をモットーに人生の中葉をあゆむ西山さん。人材に恵まれた建設省内でも趣味を実益に昇華させた，異色の存在であろう。

〔文責・編集部〕

西山さんの 30 年以上に達する模型飛行機歴は，外注すると 10 万円はかかる機体を2万円そこそこでつくり上げる敏腕を育て，エンジン等約2万円，無線機器 8～10 万円，カメラなどの代金を加えての総額は約 30 万円。この金額で，模型飛行機による航空写真をとにかく実用化しうるまでになったのである。

「簡易航空写真撮影装置」——これが最初に提出された申請書類の標題。子供の日に育てた大空への夢は，この書類に帰結して国土をはかるというユニークな発展をたどる。全自動無線操縦装置に加えて，地上からコントロールできる写真撮影装置，回収時に使用する地上からコントロールできるパラシュート機構，etc……。多くの試練を経た試作機は昨春みごとに処女飛行に成功，そして大きく改善された実用機は新木曽川橋梁の交通量の測定，静岡の海岸における汀線移動の定期観測，洪水時の諸情報の記録，そして，今回の大沢崩れの流路移動の